

## アトモスフィア

## どうして、ごきぶりは？

二井 將 光\*

週末の昼間、目的もなく町に出る。関西なら河原町とか心齋橋、東京なら日本橋や丸の内の界隈でしょうか。ふと本屋に入って、立ち読みをする。バイオとかが並んでいる専門書のコーナーがないところも多い。どんな本でも、気に入ったら何冊でも衝動買いです。喫茶店で、挽きたてのコーヒーをゆっくりと味わいながら、買った本を読む。名誉教授になる前からの私の贅沢です。

15年ほど前に、こんなひとときの中で、気に入った本に「幼児のつぶやきと成長」(亀村五郎著)というのがあります。著者が収集した2~5歳の幼児の発言を集めたものです。いくつか、紹介しましょう。「どうして、ごきぶりはきたないの、おかあちゃん、おふろにいれて、きれいにあらたり」、「へびは、どこから、しっぽなの」、「どうして、外側はくびで、中はのどなの」、など、聞いて、なるほどと思う生物に対する疑問に感心しました。文化的なことと言えば「むかしって、おじいさんとおばあさんが、たくさんいたのね」、というのもありました。確かに御伽噺は「昔々、おじいさんとおばあさんがいました」から始まります。白紙の心から出た、先入観のない、素朴な疑問です。

こんな疑問は大学生や大学院生になるとどこかに置いてきてしまっている人が多いようです。そこで、学部とか大学院の講義の中で「幼児の発言」を引用してきました。研究を進める上で、幼児ようになって、原点からの疑問を持つことが大切であることを強調してきたように思います。素朴な疑問からの研究が、大きな基礎科学の発展につながり、新しい分野を拓き、応用科学へと広がっていくことは、生化学や分子生物学の歴史を見ると自明なことです。

素朴な疑問からの研究は、キットやマニュアルを駆使する研究や研究費を沢山もらって始める研究でもないように思います。ましてや、競争の中で、追い詰められるような気持ちでやる研究でもないでしょう。研究者の精神的、そして時間的余裕から生まれる発想によるところが大きいように思います。

大学は企業とは違って、原点からの研究をするところ、すぐに役に立つ研究をするところではないし、学生が将来の利益を忘れて勉強する時間のあるところとっていました。しかし、最近ではそうでもなさそうです。ある会で、20世紀は大学の自治の時代、21世紀は大学の評価の時代である、という話を聞き、なるほどと思いました。確かに、教育と研究は学術的な評価に耐え、納税者や学生も理解しなければなりません。

一方で、大学が受ける評価が一つだけではなく、複数の機関から異なる評価を受けなければいけないとか、評価の書類を作るのに半年もかかった人もいます。研究費の申請書を書くのに何ヶ月かかったという声も聞こえてきます。こんなことを考えると、世界的な研究をやり、立派な卒業生も出ていると認定した時点で、この大学・研究機関は、20年間は評価の対象としないといった英断も必要でしょう。この研究者には、10年間は評価なしで十分な研究費を支給するといった判断だってできるでしょう。

そして、余裕のできた研究機関や研究者が、社会的責任を自覚した上で、素朴な疑問から、原点から、生み出す仕事に期待してもよいのではないのでしょうか。次の世代に「むかしは、どうして?」と聞かれぬ為にも。

\*岩手医科大学教授、大阪大学名誉教授、本会名誉会員